

特別企画「禅を知る」



企画展

禅と西田幾多郎

ZEN



## はじめに

禅と哲学者——それは、「言葉で到達できない境涯」と「言葉の限りを尽す者」との対峙といえます。

西田幾多郎が、禅の修行を続け、名著『善の研究』を執筆していた三十代から、生涯をかけて念願し続けた禅と哲学の結合とは何なのでしょう。

後に「日本を代表する哲学者」となる西田が、特に禅の修行に打ち込んでいったのは、まだ彼が金沢で四高講師をしていた二十代後半でした。この時期は、家庭的には、西田家の没落・親族や両親の不和・妻との離縁などがあいつぎ、社会的には、語学教師として高校等をやむなく転々とするという、彼にとって非常に不安定で悩み多き時期にあたります。

そのように日常生活が切迫した状況の中で、西田は家で毎日のように朝昼晩と坐禅をし、金沢卯辰山の洗心庵や京都妙心寺へ参禅を続けます。しかしこれは、決し

て、思い通りにならない日常生活からの逃避ではありません。むしろ、切迫した状況の中で彼が選んだ「禅の修行」とは、そうした現実を直視する作業でした。

今回の企画展では、西田が自ら残した禅語の「書」が展示されています。書自体は、四十代以降に揮毫されたものですが、その源泉は、彼が若かりし頃に修行した禅体験にあります。この小さな企画展だけで「禅を知る」ことができるとはとても思えませんが、西田幾多郎を通じた禅、禅を通じた西田幾多郎、そしてそこに横たわる「日常」を知る小さな契機になれば幸いに存じます。

最後になりましたが、この企画展の開催に際し、展示品をご寄贈いただいた方、ならびに関係者の皆様に対しまして、心より感謝いたします。

石川県西田幾多郎記念哲学館



# 目次

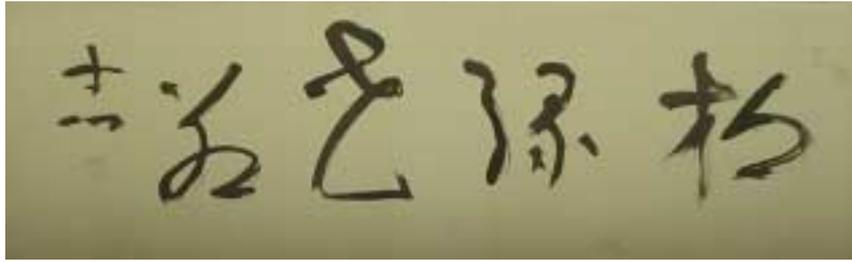
|       |                                  |   |
|-------|----------------------------------|---|
| No. 6 | 百花香                              | 8 |
| No. 5 | 道不属知不知                           | 6 |
| No. 4 | 乾坤無地卓孤筇且喜人空法亦空<br>珍重大元三尺劍電光影裏斬春風 | 5 |
| No. 3 | 廓然無聖                             | 4 |
| No. 2 | 一夜落花雨 滿城流水香                      | 3 |
| No. 1 | 柳綠花紅                             | 2 |

|        |                             |    |
|--------|-----------------------------|----|
| No. 10 | 自強不息                        | 15 |
| No. 9  | 吾こころ深き底あり<br>喜も憂の波もとどかじと思ふ  | 14 |
| No. 8  | 心即是佛々即是心々佛如々亘古亘今            | 12 |
| No. 7  | 無事於心 無心於事<br>物となつて考へ物となつて行ふ | 10 |

|                 |    |
|-----------------|----|
| 付・禅に関する常設展示     |    |
| ① 寸心の法号授書       | 7  |
| ② 西田幾多郎宛の滴水禅師書簡 | 9  |
| ③ 一日不作 一日不食     | 13 |
| ④ 無             | 15 |



## No. 1



## 柳緑花紅 寸心

柳は緑 花は紅  
やなぎ みどり はな くれなゐ

柳は緑の糸を落とし、花は紅色に咲いている。何の変わりばえもない春の情景ですが、その当り前の日常生活の中に、真の美しさを見る事ができます。目の前の柳はそのまま緑でよいし、花はそのまま紅でよい。わざわざ柳と花を比べて、どちらが美しい、どちらが優れていると言うのではなく、それぞれがそれぞれで在るがままでよい。人間も同じことです。

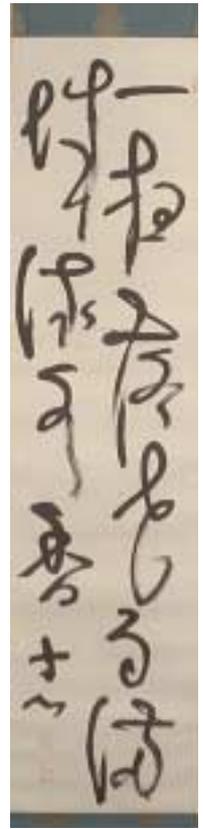
そうは言っても、世の中にはたくさんさんの「区別」があります。その区別

から、差別・比較・優劣・競争が生まれてしまいます。禅では、そうした区別(分別)ぶんべつを避けませんが、だからといってその区別を見ないふりをするというものではありません。むしろ、真実のままに見れば、その違いはくつきり浮かび上がってきます。やはり柳は柳であって、花は花です。無理に柳を花だと思ふことも、同じモノだと思ふこともありません。それぞれにはそれぞれの個性があり、その個性を生かしたまま、そこに真実を見ればよいのです。ただ、そこには優劣も競争もない、個々があるがままに生きている世界がひらけています。

『金剛経川老註中』、『東坡禅喜集』  
 『西田幾多郎遺墨集』(以下『遺墨集』)一六八



No. 2



一夜落花雨 満城流水香 寸心

いちや らつか あめ まんじょうりゆうすいかんぼ  
一夜落花の雨 満城流水香し

一夜にして花々を散らす雨が降り、街全体に清らかな水が流れ、空気にはその香りが満ちて、澄みわたった春の早朝にいるようです。これだけでも美しい詩ですが、禅的にも深い意味があります。

この詩は、中国宋代の禅僧・雪竇せつとう（道元の師如浄にょじやうの師）が作った五言絶句の後半であり、実は、

世尊せそん有密語みつごあり 迦葉かしょう不覆蔵ふぞうせず

という句がその前に置かれています。世尊（ブツダ）には密語—真実の自己に関して切れることのない親密な言葉—がある。十大仏弟子の一人・迦葉（カーシャパ）に

は、それを覆い隠して蔵することがない、というわけです。

ところで、世尊が靈鷲山りょうじゆせんで一本の華を手にして示した

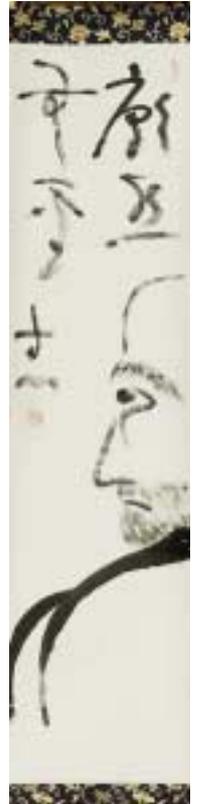
ところ、皆がその意味をわからず黙っていたとき、迦葉だけが意味を理解して微笑んだため、世尊は迦葉に仏法の真髓（正法眼蔵）を伝えたといえます。禅宗の基礎をなす不立文字・教外別伝を示す伝説的な拈華微笑ねんげみしやうの故事ですが、こうした世尊（師）と迦葉（弟子）の在り方が、この「一夜落花雨…」にも表れています。

解釈の一例を挙げれば、「落花の雨」とは師からの（法の教え）であり、「城」は弟子の（心身）と言えます。花が「一夜」で落ちたとしても、雨によつて散るまでに咲きほこるためには幾度とない「雨」が必要です。そうした「落花の雨」が「城」に降りそそぎ、「城」はその全てに「雨」の水を流して、「香」で満たされます。花・雨・城・香のどれもが切り離されない「密」となります。

『正法眼蔵』第四十五 密語、『遺墨集』一一三



## No. 3



かくねん むしよう  
廓然無聖 寸心

（画は達磨の横顔）  
ダルマ

仏教を熱心に信奉していた梁の武帝は、達磨禪師がインドから中国にやってきたと聞いて、達磨を宮中に招いて質問をしました。

武帝は、まず「私は、寺を建立し、多くの僧を供養したが、どのような功德くどくがあるのか」と達磨に尋ね、自分の功德の大きさを確認しようとしています。ところが、達磨は「功德など無い（無功德）」とむげに否定します。さらに武帝は「では、仏が教えたという聖なる真理（聖諦）の中でも、最も大事な意義（第一義）とは何か」と尋ねますが、達磨は「廓然無聖」と喝破したといえます。

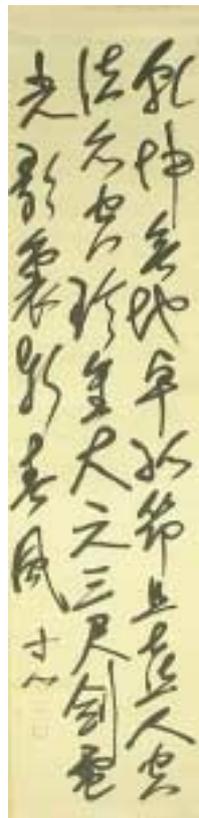
「廓」とは、一応は枠で囲われたその中に何も無くか

らっぱで広々としていることで、この「廓然」とは、雲一つない快晴の空のようにカラツとして何もない様子を表します。そして、さらに言う「無聖」とは、宗教的な価値である「聖なる真理」さえも無いというわけです。自分の功德や聖なる真理に対して武帝が持っている執着を見事に退けながら、大乘仏教の特徴であり根本である「空」が現われています。

「廓然無聖」には、世間的な価値（俗）に執着することが否定されるだけでなく、宗教的な価値（聖）への執着さえも否定されています。そうした聖と俗という二元的な対立を超えながらも、絶望的な虚無に陥ることなく、そこにはどこかカラリと晴れ晴れした肯定がうかがえ、まさに禅の特色を表す言葉といえます。

『碧巖録』一、『遺墨集』二〇八

No. 4



乾坤無地卓孤筇且喜人空法亦空  
珍重大元三尺劍電光影裏斬春風

乾坤けんこん 孤筇こきゆう を卓たつ するに地ち なし

且喜しよき すらくは人空ひとくう 法ほう も亦また 空くう なり

珍重ちんちゆう す大元たいげん 三尺さんじやく の劍けん

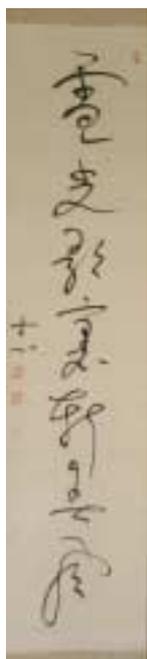
電光でんこう 影裏えいり 春風しゅんぷう を斬き

中国南宋の末期の禅僧・無学祖元むがくそげんの言葉です。モンゴル(元)の軍勢が南宋の温州を襲ったとき能仁寺に滞在していた祖元は、寺の雲水達が皆逃げ去った後も、ひとり悠々と坐禅していました。いよいよ寺にも元軍が乱入し、元兵が白刃を祖元の首に当てたとき、祖元は少しも動ぜずに、この偈を述べたといえます。

乾坤(天地)には一本の杖を立てる所もない。それはそれとして、人(主観)は空であり、法(客観)もまた空である。いつさいは空なのだから、元兵の三尺もの剣で斬られるとしても、それはそれでよいだろう。そんなものは、電光の一閃が春風を斬るようなものだ。空を斬っても手ごたえはあるまい

元兵は祖元の説法に聞き入り、その命をとらずに去つたと伝えられています。後に祖元は、北条時宗ときむねの招きで日本に渡り、時宗の禅師となり、元の日本襲来を防ぐ時宗の精神的支えとなりました。鎌倉円覚寺の開山となり、時宗の没後二年で世を去り、仏光国師おくりなの諡を受けました。

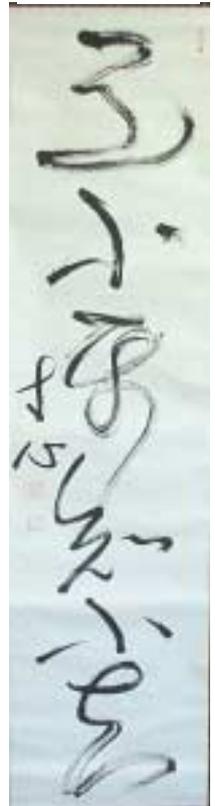
『仏光録』、『遺墨集』一八八



電光影裏斬春風 寸心



No. 5



道不属知不知 寸心

道は、知にも不知にも属さず

唐代の禅僧の南泉なんせんと趙州じょうしゅうの師弟の問答に由来します。弟子・趙州が「道」について師に尋ねます。

趙州「道とはどんなものですか」

南泉「日常の心が道である(平常心是道)」

趙州「では、努力してそれに向うべきでしょうか」

南泉「いや、それに向おうとすると逆に逸れてしまう」

趙州「しかし、向おうともしないで、どうしてそれが道

だと知ることができるとでしょうか」

南泉「道とは、知るとか知らないとかいう「知」に属す

るようなものではない(道不属知不知)。道を知るとしたら、そんなものは妄想にすぎないし、知ることができないのならば、どうしようもあるまい。しかし、もし本当に疑いのない道に達して生きていることができれば、この大空のようにカラリとする(廓然)。それをどうしてああだこうだと詮索することがあろうか」

禅語としては、元は南泉の師・馬祖ばその言葉であり、端

的に道の日常性を述べる「平常心是道」の方が有名で

す。この道の日常性は、禅だけでなく、剣の道にも通じ

ます。柳生宗矩むねのりは、『兵法家伝書』の中で「道とは何たる

事を云ふぞととへば、常の心を道と云ふ也とこたへられ

たり。実の至極の事也」と右の問答を解説し、また「此

平常心をもつて一切の事をなす人、是を名人と云ふ

也」とも述べています。名人は、命にかかわる危機でも、

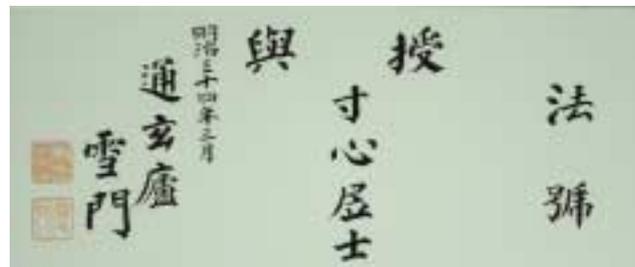


変わることなく平常心であるということです。言い換えれば、日常稽古の時の心がそのまま危機における心となるわけですから、変わらぬ平常心がつけられる日常そのものを鍛えていくことが大事になります。茶の道では、千利休は「茶の湯とはただ湯をわかし茶を点てて飲むばかりなるものこそ知れ」と言いました。

一方、西田幾多郎には「我々の最も平凡な日常の生活が何であるかを最も深く掴むことに依って最も深い哲学が生まれるのである」という言葉があります。真理は日常の奥底にあり、単なる研究対象として向うような「知識」ではありません。『善の研究』（第三篇第十章）にも「古人も道は知、不知に属せず」の引用が見られます。西田にとつて、趙州の道は、哲学の真理に通じるものがあるようです。

『馬祖語録』、『趙州録』、『無門関』十九  
『遺墨集』二二三

## 禅に関する常設展示①



すんしん  
寸心の法号授書

金沢四高教授であつた西田幾多郎は、時を見つけては、金沢卯辰山の麓うたつやまにある洗心庵せんしんあんの雪門せつもん禅師に参禅を続けました。明治三十四年三月、雪門は、そうした西田の修行の落ち着きを見て、戒を施し、居士（禅の在家修行者）として「寸心」という号を与え、正式な弟子としました。

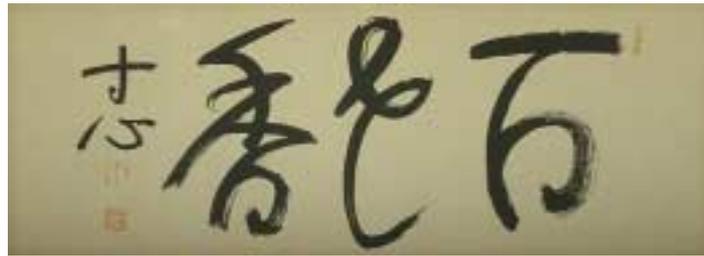
西田は、自分の書のほぼ全てにこの「寸心」という号を用いています。

（図録『西田幾多郎の世界』より）

授 法号  
寸心居士  
与  
明治三十四年三月  
通玄廬  
雪門



## No. 6



ひやつかかんばし  
百花香 寸心

中国唐代末の禅僧・風穴ふうけつに、ある

僧が次のような難問を出しました。

「黙っていれば、意識は内へと向かつて沈みこみ、外界から離れて平等・絶対の境地に入ります。一方、言葉が発すれば、意識が外のような現象に向かつていき、区別・相対の世界に入ります。つまり、黙すれば、相対的な日常世界から隔絶してしまい、言葉が発すれば、絶対的な境地には入れない。どうすれば、そのどちらをも犯さずにすむのでしょうか。」

そこで風穴は、こうした理屈っぽい

難問に、論理的に説明せずに、次の杜甫の詩の一節で見事に応じます。

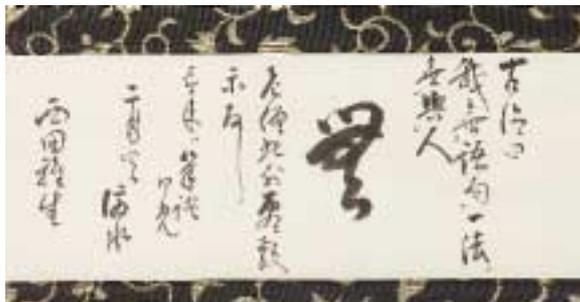
「長憶江南三月裏 鷓鴣啼處百花香」

としな としな 長えに憶う江南三月の裏、鷓鴣啼く処百花香し うち しやくこ ところひやつかかんばし

江南は中国で最も風光明媚なところで、しかも陰曆三月ともなると、姿は見えないが鷓鴣が美しい声色で鳴き、桃・杏など百の花々が香しく咲き乱れます。そうした春景色を憶い慕って忘れられない、という詩です。この返答は、美しい現象世界に意識を向けながらも、そこには同時に内的な沈潜があり、互いに打ち消し合っていない、という意図でしょうか。姿の見えない鷓鴣は、内への沈潜を象徴するかのようです。

西田幾多郎は、論理的な(そして難解な)説明を長々とする「哲学者」ですが、詩を詠み、書を揮毫するときには、要点を捉えながらもさらりとした「百花香」のような句を好みました。 『無門関』二十四、『遺墨集』六一

## 禅に関する常設展示②



古徳日

我無語句一法

無与人

無

老僧此外更に教

示なし

已来は筆談御免

二月四日

滴水

西田雅生

### 西田幾多郎宛の滴水てきすい禅師書簡

洗心庵に通い始めて間もなく、本格的な禅の修行に  
触れたい思いから、西田は滴水禅師を隠居先に訪ね  
ました。滴水は、幕末の剣聖・山岡鉄舟やまおかてつしゅうの師で、天隆  
寺の元管長の禅傑として名を馳せていました。しか

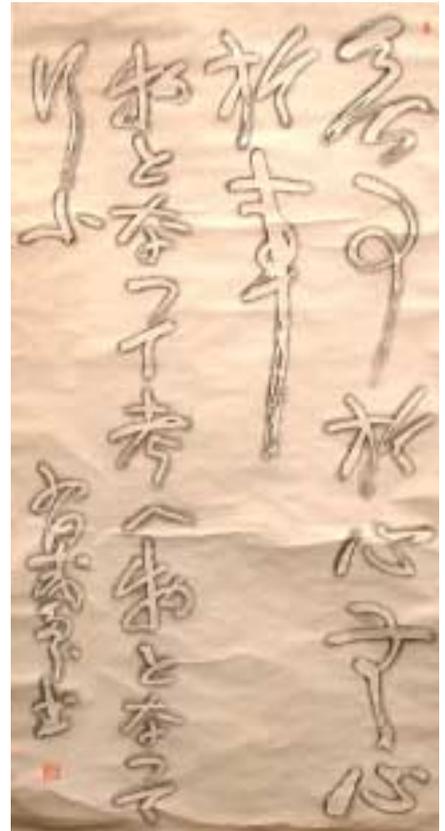
し、その訪問は西田の問題の解決にはならなかったよう  
で、彼は、翌年にまた滴水に教えを乞う手紙を送ってい  
ます。その手紙に対する滴水の峻烈な返事がこれ  
です。

「我に語句無く、一法の人に与えるもの無し」は、もと  
は中国の禅僧・徳山とくざんの語です。中央に大きく書かれた  
「無」は、「与えるもの無し」という語の本来の内容をず  
ばりと呈示しています。「無」以外に私には何も教示す  
ることはない、今後筆談は御免だという言葉は、禅的に  
はいちばん親切な教えでもあります。後にその意を理  
解したにちがいない西田は、この手紙を大切に保管して  
掛軸にしました。

(図録『西田幾多郎の世界』より)



No. 7



こころにおいてぶじ **無事於心** ことにおいてむしん  
もの **無心於事** かんが もの  
**物となつて考へ物となつて行ふ** おこな

西田幾多郎書

昭和十五年、長野県南安曇野高家豊科町から記念碑建立のための書を依頼された西田幾多郎は、その頃執筆していた哲学論文の中からこの二句を選んで揮毫しました。前半の漢文は中国唐代の禅僧・徳山の言葉、後半は西田幾多郎自身の言葉です。

徳山は次のように言います。

於己無事即勿妄求 妄求而得非得

汝但無事於心無心於事 即虚而靈 寂而妙

己みだにおいて無事なれば即ち妄みだりに求むること勿れ  
 妄みだりに求めて得るとも得るにあらず

汝なんじ但心において無事 事において無心なれば

即ち虚きよにして靈れい 寂じやくにして妙みよ…『景德伝燈録』

例えば、私達は日常生活でいろいろな出来事に出会います。そうした何かの事柄の真相をつかむには、自分の心にこだわらず、自己を空しくして、その事柄そのものの真実に従わなければなりません(無事於心)。ですが、その出来事に従うといつても、自分で何も考えずに、ただ妥協するということではありません。むしろ、その事柄に徹して真実をつかむためには、逆に、自らの心の深いところにおいて、どこまでも自己を尽さねばなりません(無心於心)。いわゆる「無心」といつても、自己

がなくなるわけではなく、あくまで自己は自己のままです。「無事」といつても、事がなくなるわけではなく、その出来事は、出来事として現実にあるわけです。

昭和十五年頃の西田の論文から、読みやすいように少し文字を変更・省略して次に引用します。

親鸞じねんほうにの自然法爾の自然というのは、人間そのものの底に人間を否定したものでなければならぬ。それは事に徹するということである。身心脱落 脱落 身心の立場、更に徳山の無事於心 無心於事の立場である。

東洋文化は直観的と考えられる。…真の直観とは、…見ることが働くことであり、働くことが見ることであり、見るということと働くということとの矛盾的自己同一、作用と対象との矛盾的自己同一ということである。見るということは自己が物の世界の中に入って働くことである、物となって考え物となつて行うことである。『日本文化の問題』

自然法爾とか無事於心 無心於事とかいう東洋的無心とは、自己がなくなるとか非合理的とかいうことではない。物を自己となすというに反して、自己が物の自己となることである。…自己はどこまでも自己である。ただそれは絶対の事物となるのである。故に物となつて考え、物となつて行うという。かかる東洋的無心の立場というのは、…自己が物となつて消される立場ではなくして、自己が物として働く立場、自己が含まれる立場である。

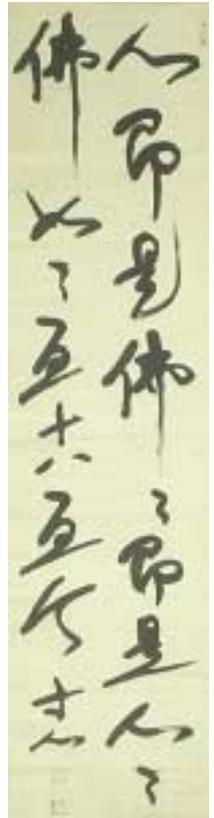
『哲学論文集 第四』『ポイエシスとプラクシス』



信濃教育会生涯学習センター  
横の公園内に立つ記念碑



No. 8



心即是佛 々即是心 々佛如々 亘古亘今

心しん すなわは即こち是ぶつれ佛ぶつ すなわ 佛こは即しんち是ぶつれ心こ

心佛しんぶつによによ如々いだしえとして 古わたに亘いまり今わたに亘わたる

西田幾多郎は、二十代から三十代にかけてよく禅寺で新年を迎えています。三十四歳で迎える明治三十八年元旦も、金沢卯辰山の洗心庵にて雪門老師のもとにいました。日記に「法燈国師が驚おどろに題する投機ていけいの偈げ」という文とともにこの偈が記されています。同じく「午前ごぜんは和尚と話して過した」という記載もあるので、雪門が西田にこの偈を教えたのでしょうか。

法燈国師とは、平安時代の僧・覚心おくりなの諡おくりなで、日本で

は道元、中国(宋)では、『無門関』で名高い無門慧開えかいにも参じた、臨済宗法燈派の祖です。

意味としては、心が仏であり、仏が心である、心も仏も同じく真如であり、それは古今を通じて変わることがない、というほどの意味でしょうか。

おそらくは、『無門関』第三十「即心即佛」に見られる大梅とその師・馬祖の間に交わされた次の問答に由来していると思われます。

大梅「仏とは何ですか(如何是仏)」

馬祖「心そのものが仏である(即心即仏)」

心は、人の日常生活で様々に変化します。喜び、怒り、悲しみ、楽しみ、いわゆる喜怒哀楽のほかにも、怠け心、邪まな心も生じます。そうした様々に移り変わる本源としての心、あるいはそれらを全て含めた意味での心、それが「仏」というわけです。同じく馬祖の言葉



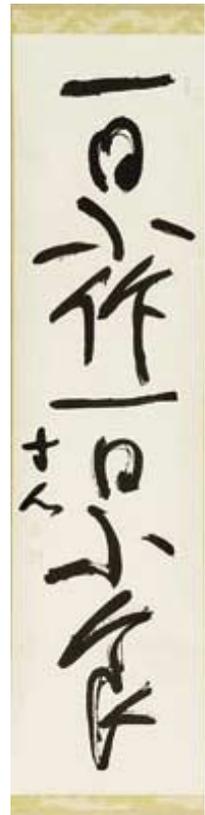
である「平常心是道」に通じます。

同じく日記には「昨年は余の一身にとりては実に不幸な年であったが、今年はどうか幸福でありたいものだ」「午後打坐、…夜打座」「今日は怠った。和尚にももらった二杯の年始の酒に酔ふて、ねてしまった」という文もあります。西田は、その前年に日露戦争によって幼馴染と弟を亡くしています。いまだ癒えていない哀しみの心、少しの酒に酔って寝てしまったと自らの怠惰を思う心。西田は、洗心庵に参禅しながら、そうした心が仏だという法燈国師の言葉を日記に記し、後に書を揮毫したのでした。

『無門関』第三十「即心即佛」

『遺墨集』一一〇

禅に関する常設展示③



一日不作 一日不食 寸心

一日作なさざれば 一日食くらわず

禅宗では、なによりも作務さむ(日常的な作業)を重視します。

この言葉は、この作務の制度を定めた中国の禅

僧・百丈懐海ひやくじょうえかいの言葉で、「働かざるもの食うべからず」

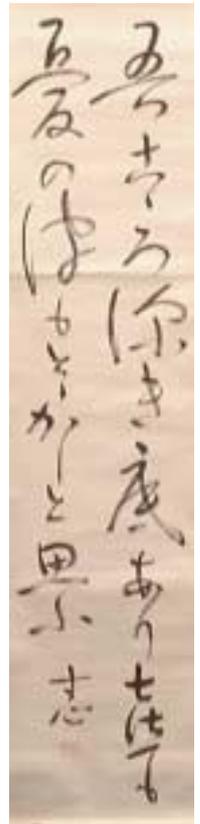
に似ていますが、そのような強制的・命令的なものではなく、あくまで自制・自戒の意味になります。金沢時

代に京都妙心寺の虎関こかん禅師にこの語を揮毫きしうしてもらった

西田は、これを自己激励の言葉として居室にかけていました。後に自らもこの言葉を揮毫し、生涯にわたって座右の銘としています。



## No. 9



わが  
吾こころ深き底あり

よろこび  
うれい

喜も憂の波もとどかじと思ふ 寸心

この短歌が日記に記されている大正十二年頃の西田幾多郎(五十二歳)は、京都大学教授として社会的に認められながらも、家庭的には不幸の連続でした。

大正八年に、妻・寿美が脳溢血ため倒れ、それから半身不随で寝たきりとなっており、その翌年には長男・謙を腹膜炎で亡くしています。また大正十年から十二年にかけては、娘三人がそれぞれ肺炎やチフスに罹り入院を繰り返しています。

西田は、二十代から三十代にかけて激しい禅の修行を行い、それ以後は、参禅こそしなくなりますが、そうし

た若いときの経験が背景となって自らの哲学を築き上げていきます。禅の修行者・哲学者といえますと、どこか浮世から離れ、達観して喜びや憂いもないような誤解を受けますが、決してそうではありません。むしろ非常に愛情深い友であり、夫であり、親でもあった西田には、喜びや憂いの波が常に押し寄せてきます。

しかし西田は、この日常生活で必ず生まれる「波」そのものを消そうとはしません。無視することもありません。この歌には、実際に悲哀をそのまま認めながらも、その「波」が届かない心の底が詠み込まれています。「平常心是道」「心即是佛々即是心」、あるいは西田自身の言葉「我々の最も平凡な日常の生活が何であるかを最も深く掴むことに依って最も深い哲学が生まれる」が、短歌となって現われ出でています。

『寸心日記』

『遺墨集』三九



No.10



自強不息

自強じきょう息じゅうきゅうまず

『易経』の言葉です。

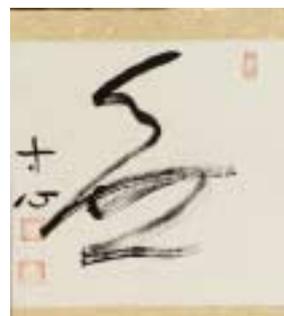
天行健 君子以自強不息

天の運行には狂いがなく、日月星辰、春夏秋冬は順序正しく進む。まさに天の運行のように、君子は、自らの力(強さ)を尽して、善をなすに止むことはない。

『易経』  
『遺墨集』四七

禅に関する常設展示④

無 寸心



滴水禅師から峻烈な返信には中央に「無」と大書されていました。同じ年に妙心寺・虎関禅師

のもとで、西田は趙州「無字」の公案を与えられています。そして六年間「無」について工夫を重ね、三十二歳で大徳寺・広州禅師によって「無字」の公案の透過をいちおう許されました。西田自身はこの透過に一向に満足せず、明治三十六年八月三日の日記には「晩に独参無字を許さる。されども余甚悦ばず」と記しています。

ともあれ、禅の経験思索へと換骨奪体しつつ哲学を展開した西田にとって、「無」の根本体験はその思索の基盤にして基軸となりました。

西洋哲学の諸部門のなかで「第一哲学」と呼ばれたのは「存在論」でした。それに対して西田哲学は、どこまでも「無の哲学」でした。(図録『西田幾多郎の世界』より抜粋)



特別企画「禅を知る」

企画展「禅と西田幾多郎」

開催期間 2004年11月27日

～2005年2月27日

発行 石川県西田幾多郎記念哲学館

〒929-1126

石川県かほく市内日角井1番地

TEL (076)283-6600

FAX (076)283-6320

発行日 2004年11月27日発行

文責 大熊 玄 (専門員)



中央：禅の修行をしていた四高教授時代の西田幾多郎（35歳）

禪は音楽なり、  
禪は美術なり、  
禪は運動なり、

之この外ほか 心いしやの慰藉いしやを求むべきなし